

# AAINews

APPROPRIATE AGRICULTURE INTERNATIONAL CO., LTD

国際耕種株式会社

〒194-0013 東京都町田市原町田 1-2-3 アーベイン平本 403

TEL/FAX: 042-725-6250 Email: aai@sk9.so-net.ne.jp

## Incentive と Sustainability : シリアで考えたこと

シリアで農業普及員の訓練に関わる業務を担当しているが、各種訓練コースの実施に伴って、「Incentive」（動機付け）と称してコース参加者に日当を配ることが常識化している。このようにお金を渡すことによって訓練コースへの参加を促し、訓練の効果をあげるためと彼らは「解説」するが、Incentive を渡すことによって参加者を動員している、とも言える。背景には公務員の給料が安いということもあるが、お金を払うことが「訓練の形骸化」に一層拍車をかけている、という気もする。結局、お金をもらえるから参加するわけで、「中身は二の次」になってしまっているのではないか。同じように、最近住民参加型の開発が注目されているが、ここでも似たようなことが行われている場合がある。「住民参加型開発」では文字通り、「住民」の「参加」がプロジェクトの実施及び成功のために不可欠であるが、現実には「地域住民の自発的な活動」というより、金銭的魅力（Incentive）で地域住民をプロジェクトに動員している（住民に参加してもらっている）、といった例も見られる。

これは、好意的に見れば「Incentive」は限られた期間に一定の成果を出すために必要な手段であるし、また多くの場合住民の労働に対して対価を払っているわけで、「雇用の創出」という面があるとも言える。しかし、Incentive が与える影響は短期的なものだけでなく、長期的な影響も考えるべきであろう。「限られた期間に一定の成果を出す」というのは、プロジェクト実施側の都合ではないのか。プロジェクトが実施されている間は予算もあるし、住民に金銭的 Incentive を与えることはできるが、そのプロジェクトが終了したあとは「金の切れ目が縁の切れ目」になりはしないか。だとすればプロジェクトの持続性（Sustainability）を考えた場合、短期的成果を求めるための Incentive は長期的にはマイナスの影響を与えるのではないか。もちろん、ドナー側としては人材、資金、機材を投入してプロジェクトを実施しているわけで、限られた期間での成果の「評価」を行う必要もあるだろう。しかし、プロジェクト担当者の「実績」のためにプロジェクトの Sustainability を犠牲にしてもいいのか、という疑問は残る。

Sustainability に対する影響の他に、Incentive が与える別の弊害もある。それをシリアの植林における例で見てみる。シリアでは森林面積（現在、国土の約 3%）の増加を目的として、植林を行っているが、植林作業には地域の住民を労働者として雇用し、雇用創出を図りながら住民参加の植林活動を実施している。これは一見理想的な姿にも思えるが、植林に関連して問題となっているのは山火事の発生である。これは煙草の火の不始末等の不注意もあるが、「放火」も一つの原因となっているようだ。つまり、植林が終わってしまえば仕事がなくなるが、山火事を起こして燃やしてしまえばそれが新たな雇用の創出につながるわけだ。これでは何のための植林かわからない。

さて、このような「実態」の中でいったい何ができるのか？ 「特効薬」のようないい案はないのかもしれないが、参加型開発プロジェクトあるいはトレーニングの内容を少しでも住民や参加者のニーズに合ったもの、魅力的なものにしていくことは重要な要素であろう。また、あえて短期的な成果を求めず、長期的な展望の中で仕事をする、という姿勢も必要かもしれない。（在シリア：湖東）



農民からの聞き取り調査



訓練センターにおける講義風景



ドリップ灌漑の訓練コース

## シリアにおける園芸療法の試み ～夢を形にするために～

「園芸療法 (Horticultural Therapy)」とは、植物や園芸作業を治療や身体的あるいは精神的リハビリテーションのための手法として用いるものである。園芸の「療法 (セラピー)」としての活用は、主に精神病患者を対象とした屋外作業として古くから取り入れられてきた。第二次大戦後からは、欧米を中心に「園芸療法」として研究され始め、アメリカでは現在、療法としての有効性が認められ、その指導にあたる「園芸療法士」としての資格も社会的に認知されている。日本でも近年、医療・福祉施設や地方自治体等が障害者や高齢者のケアを目的とした導入に関心を向けている。



園芸療法の効果としては、園芸作業実施に伴う身体的な機能回復や、香り、色、大きさ、手触り等五感を適度に刺激することによる情緒安定化等の効果も期待される。また、園芸活動を通して、知識や技術も習得でき、観察力や判断力、計画性等も養われるなど、知的発達にも有効である。さらに、植物を育てることによって、自分が誰かの役に立ちたい、必要とされたいと思う気持ちをかなえてくれる、という面もある。

園芸療法で重要なことは「結果」より「経過」であり、「園芸」が結果（できた物）を大事にするのに対して、「園芸療法」はプロセスを重視している。つまり園芸療法では、完成品のできばえや収穫量を評価することが第一目的ではなく、野菜や花を育てていくプロセスが対象者にどう影響を与えるか、ということが一番大切である。言い換えれば、園芸作業を通して対象者が癒されること、あるいは自分でも何かできるんだという達成感を味わうことが重要である。したがって、対象者の能力や障害に応じたプログラムを組むことが必要で、園芸作業の作業項目や内容の検討はもちろんのことであるが、野菜や花の栽培自体のほかに、野菜の収穫祭、とれた野菜を使った食事会、花の写生大会、花束作り等々、関連するイベントを計画することも含まれる。

さて最近、シリアの首都ダマスカス郊外のコドセイヤにある知的障害者の養護学校で、専門家・協力隊員有志の協力のもと、「園芸療法」のための畑作りを開始した。雑草取り、畑の耕し、堆肥と肥料入れ、種まき、苗床作り、水まき、それから柵用のプレート作り、と作業は盛りだくさん。3pm から始めて、休憩をはさんで 6pm 過ぎに無事作業終了、きれいな畑が完成した。

シリアのような国で仕事をしていると、いろいろな問題につきあったり、悩んだりすることがよくある。そんな時、一人だけでがんばるより、隊員同士、専門家同士、あるいは専門家と隊員の組合せで協力し合っていければもっと大きな力になれるのでは、と思う。考え方や価値観を共有できる人たちが会おうとき、1+1が2以上になるような可能性、組合せがある。それが、人と人が協力する価値やおもしろさだと思う。また、何かをしようとする時、「夢」だとか「理想」があり、そしてそれを実現させるための方法やステップがある。この「園芸療法プロジェクト」、まだやっと第一のステップが始まったばかりだが、やり方によってはシリアでの技術協力のあり方やシリアの養護システムのこれからの大きな影響を与える可能性を秘めているのかもしれない。「夢を形にするために」、このプロジェクトが「みんなの夢を乗せたプロジェクト」になれば、とひそかに思う。

(在シリア：湖東)

